

02-022

乳幼児と養育者に対する防災プログラムの検討と課題

鈴木 一成、金子 奈央、野澤 早織、吉田 真依、井上 貴裕、栗原 昂宏、亀田 純菜、小林 沙紀、藤代 沙希子、久保 恭子、穴戸 路佳、武田 智晴

東京医療保健大学 東が丘・立川看護学部 看護学科

【目的】 本研究の目的は乳幼児と養育者に対する防災プログラムの検討と課題を明らかにすることである。

【研究方法】 研究対象：東日本大震災以降、東京都内で乳幼児と養育者に対して防災プログラムを実施した団体方法：半構造化面接データ収集期間：2019年6月28日～2019年9月30日。分析手順：逐語録から、防災プログラムの内容や工夫について書かれている文節を一つの「内容」として、意味内容の類似性に従い、カテゴリー化した。

【倫理的配慮】 対象者に研究目的、方法等を説明し同意を得て実施した。東京医療保健大学ヒトに関する研究倫理委員会による承認を得て実施した。

【結果】 承諾の得られた7団体を対象とした。7団体すべてが体験型防災プログラムを実施しており、うち4団体が体験型と併せて講義型防災プログラムを実施していた。体験型防災プログラムの内容は《地震直後を想定した体験》《火災を想定した体験》《災害後の生活を疑似体験》《思考型の体験》《防災グッズ作成体験》の5つのカテゴリーであり、プログラムの工夫として、《子どもの成長・発達にあわせた防災プログラム》《親子・子どもが参加しやすい防災プログラム》《参加者自身が設定するオーダーメイドの防災対策への支援》《主催者・防災プログラムのブラッシュアップ》《地域特性に合わせた防災プログラム》《身を守ることが主軸》《防災グッズへの関心を高める》《参加者の確保》《特別なニーズにあわせた防災プログラム》の9のカテゴリーがあった。課題は《他の地域への対応》《防災プログラム内容の確立》《他国籍者への対応》《難しい評価方法》《難しい開催費の確保》《参加者集めの難しさ》《運営するスタッフへの負担》《託児所の設置が必要》の8のカテゴリーで構成された。

【考察】 乳幼児と養育者に対する防災プログラムは、災害時あるいは災害後の生活を乳幼児と養育者が体験する防災プログラムが多かった。子どもが《地震直後を想定した体験》することで、防災知識の獲得や危険察知・回避能力を身に付けられると考える。今回、参加者自らの防災の理解を促すために防災プログラムに《思考型の体験》を取り入れていた。防災プログラムの課題として養育者を対象とした防災プログラムの充実、防災プログラムの形態における託児所の必要性、新たなフェーズに焦点をあてた防災プログラム、特別なニーズを持つ児への防災プログラムの必要性がある。

02-023

専門職による子どもの貧困支援—JUICE CLASS（学習・生活・相談支援）の試み—

伊藤 智恵子^{1,2)}、笹瀬 瑛子^{1,2)}、加藤 真理子^{1,2)}、柏木 直見^{1,2)}、宮司 登志江^{1,2)}、尾関 ゆかり^{1,2)}、遠藤 雄策^{1,2)}、平野 浩一^{1,2)}

浜松市発達医療総合福祉センター¹⁾、一般社団法人 みらいTALK²⁾

【はじめに】 近年日本の子どもの貧困率調査が行われ、その実態等も明らかになるにつれ全国各地に生活困窮家庭の子どもの支援としての学習支援やこども食堂が広がってきている私たち「一般社団法人 みらいTALK」は、子どもに関わる専門職（医師・心理士・保育士・保健師・社会福祉士・弁護士等）が、日々業務の中で感じている子どもたちの問題を、職種や所属、職域を超えて支援しようと尽力している団体である私たちも貧困が子どもたちの心身の成長に大きく影響していることに気づかされ、3年前に無料の学習支援事業（JUICE CLASS）を立ち上げた利用にあたっては、本当に必要な児童が利用できるよう、SSWや医療機関・福祉機関からの紹介制をとっている今回は専門職が運営する学習支援事業の報告をしたい

【結果及び考察】 2017.11年に3人の子どもたちからスタートした週1回の学習支援教室だが、2020.1月末現在では26人の小中学生が通ってくるようになった家庭的背景では、生活困窮のほか親の精神疾患、ギャンブル依存などの問題も併存しており、愛着障害や発達障害の診断をもっている子どもが14人（53.8%）あったまた、2019年度は児相管理ケースも4人通っていた子どもたちの家庭環境は短時間の診療では見えないことも多い。学習や食事など共に関わるうちに、ガスが止められていて冬でも水で頭を洗っている。親が何日も帰宅しないなど過酷な家庭状況が見えてきた。また、愛着障害、発達障害により落ち着かず、なかなか学習に臨めない子どもたちも多く存在する全国で行われているこうした教室にも同様の家庭の子どもたちが通っていることは想像に難くないこうした家庭状況に踏みこみ、家族の様々な相談にも対応して子どもを支えるには、専門職の関与が必要と考えるJUICE CLASSでは、学習は大学生が主に担当し、子どもと1対1体制をとっている また、学生を含め、ボランティアには、「子どもの権利と個人情報保護」（弁護士）や「対応に困る子どもの理解」（心理）など毎月様々な勉強会を提供している。支援者を支える仕組みとスタッフが必要であり、ここにも専門職が関わることで安定した教室運営が可能となる

【おわりに】 JUICE CLASSには約60人の大学生ボランティア、30人の社会人ボランティアが登録、活動している。地域には子どもたちを支える資源があり、こうした皆様のお陰で子どもたちが支えられている。ボランティアの方々に深謝したい